

## 眼部腫瘍（C69）

眼部に原発する悪性腫瘍は ICD-O 分類の場合、局在コード「C69」に分類される。

UICC 第7版においては、結膜の粘表皮癌、扁平上皮癌などは「結膜癌」の項、結膜の悪性黒色腫は「結膜悪性黒色腫」の項、ぶどう膜（虹彩、脈絡膜、毛様体）の悪性黒色腫は「ぶどう膜悪性黒色腫」の項、網膜の網膜芽細胞腫は「網膜芽細胞腫」の項、眼窩の軟部組織・骨の肉腫は「眼窩肉腫」の項、涙腺の癌腫は「涙腺癌」の項で病期分類を行うこととなった。

上記以外の悪性腫瘍が原発した場合、リンパ腫は Ann Arbor 分類に従った病期分類を行い、その他については病期分類が存在しないので TNM 分類の適用外となる。

### 1. 概要

いずれも非常にまれな疾患群である。

網膜芽細胞腫は網膜に発生する頻度の低い小児腫瘍であり、米国における 15 歳未満 100 万人に対する罹患率は約 4 であり、全 15 歳未満の悪性腫瘍の約 3% を占めている。網膜芽細胞腫は年少児で最も高頻度で発生し、100 万人あたりの罹患率は 0-4 歳で 10-14 である。5 歳未満での罹患率が 95% を占める。

### 2. 解剖

#### 原発部位

視覚器は眼球とその付属器（眼瞼・涙器・眼筋・眼窩）からなる。

**眼球 eyeball** は直径 24 mm ぐらいの球状体である。後極より少し下内側に寄った所に視神経が付着している。眼球の内部には水晶体と硝子体および眼房水があり、それを取り巻く壁の大部分が 3 重の構造（外膜、中膜、内膜）になっている。

外膜（眼球線維膜）は強膜 sclera と角膜 cornea からなる。

強膜は眼球外層の約 5/6 を占める強靱な線維膜である。強膜角膜移行部で内面に近い部分に、強膜静脈洞（シュレム Schlemm 管）という輪走する管がある。この管は眼房水の流出にあずかり、毛様体静脈に連絡している。

角膜は眼球の前 1/6 を占めて前方に凸彎する直径約 10~12 mm、厚さ約 1 mm の時計皿状の透明体である。

中膜（眼球血管膜）はブドウ膜 uvea ともいう。脈絡膜 choroid、毛様体 ciliary body、虹彩 iris とからなる。

脈絡膜は強膜の内面にある薄膜で、血管と色素細胞に富み赤黒い。これは眼球内部を暗室とし、また眼球壁の栄養をつかさどる。

毛様体は脈絡膜の前方に続く肥厚した部分である。毛様体の内部には平滑筋性の毛様体筋がある。毛様体はその内面に、中心に向かう約 70 の隆起（毛様体突起）を出し、これと水晶体の間を、無数のかなり太い線維（毛様体小帯、チン Tinn 小帯）が連結する。

虹彩は瞳孔 pupil を取り囲む前後に平たい環状の膜で、毛様体の前方に続き、水晶体を前方からおおう。虹彩の後面をおおう 2 層の上皮は、網膜の続きで、色素顆粒を多量にもつ。なお虹彩内部には互いに拮抗する平滑筋（瞳孔括約筋と瞳孔散大筋）がある。虹彩と角膜との隅角部を虹彩角膜角といい、ここには楯状のすきま（フォンタナ Fontana 腔）があって、眼房水をシュレム管へ排出させる。

眼球内膜は網膜 retina からなる。

網膜（内膜）は眼球壁の最内層部の膜である。網膜のなかには多くの層が区別されるが、最外層（すなわち脈絡膜側）を網膜色素上皮といい、その内方に杆状体および錐状体という 2 種類の感覚上皮細胞が混在して並んでいる。

水晶体 lens は前後両面が凸のレンズであって、レンズの直径は約 9 mm、前後軸は約 4 mm である。水晶体の全表面をかなり丈夫な膜がおおっている（水晶体被膜）。これに毛様体内面からのチン小帯が付着する。水晶体と虹彩との間には後眼房、虹彩の前方には前眼房があり、眼房水で満たされる。

硝子体 vitreous body は水晶体の後ろにあるゼリー状の物質で、眼球の後ろ約 3/5 を占める。硝子体は、水晶体ほどではないが、眼球の屈折系として意味をもつ。

#### 眼球付属器（眼瞼・涙器・眼筋）

眼瞼（まぶた）eyelids・結膜 conjunctiva

上・下の眼瞼があり、眼球を保護し、光刺激を遮断する。外面は皮膚、内面には血管と神経に富む眼瞼結膜がある。眼球前面の一部をおおう結膜を眼球結膜といい、両者の移行部を結膜円蓋という。眼瞼の内部には、眼輪筋やかた

い結合組織性の瞼板がある。

瞼板中には 30～40 個の瞼板腺(マイボーム Meibome 腺)が一列に存在し、導管は眼瞼後縁に開口する。前縁には睫毛(まつ毛)が 2～3 列あり、その根部に睫毛腺(モル Moll 腺)また脂腺(ツァイス Zeiss 腺)が開く。

涙腺は眼球の上外方にある小指頭大の漿液腺である。これから分泌される涙は眼球前面をうるおして角膜が乾燥するのを防ぎ、ついで内眼角に集まり、上下の涙点から次のような経路を流れる。涙点→涙小管→涙嚢→鼻涙管→下鼻道

眼窩 orbit は四角錐体状の腔で、錐体の底面に当たる眼窩口 orbital opening は前方に向き頭蓋 skull 前面に開き、錐体の頂は後端となっている。眼窩の壁をつくる骨を被う骨膜は眼窩骨膜 periorbita といわれ、骨との結合はゆるく、頭蓋外面の骨膜につづく。

### 3. 亜部位と局在コード

ICD-O 局在	診療情報所見
C69.0	結膜
C69.1	角膜, NOS 角膜縁
C69.2	網膜
C69.3	脈絡膜
C69.4	毛様体 水晶体、虹彩、強膜、ぶどう膜、眼内器官、眼球
C69.5	涙腺 涙管, NOS、鼻涙管、涙のう
C69.6	眼窩, NOS 眼窩の自律神経系、眼窩の自律神経系結合組織、外眼筋、 眼窩の末梢神経、眼球後部組織、眼窩の軟部組織
C69.8	眼及び付属器の境界部病巣
C69.9	眼, NOS

### 4. 形態コード — UICC TNM 分類第7版

病理組織名(日本語)	英語表記	形態コード
基底細胞癌	Basal cell carcinoma	8090/3
扁平上皮癌, NOS	Squamous cell carcinoma, NOS	8070/3
粘表皮癌	Mucoepidermoid carcinoma	8430/3
脂腺癌	Sebaceous carcinoma	8410/3
悪性黒色腫, NOS	Malignant melanoma, NOS	8720/3
網膜芽細胞腫	Retinoblastoma	9510/3

## 5. 病期分類

## 【結膜癌】

## ■ TNM 分類 (UICC 第 7 版、2009 年)

## ■ T-原発腫瘍

TX	原発腫瘍の評価が不可能
T0	原発腫瘍を認めない
Tis	上皮内癌
T1	最大径が 5mm 以下の腫瘍
T2	最大径が 5mm をこえ、隣接組織に浸潤のない腫瘍
T3	隣接組織に浸潤する腫瘍
T4	眼窩および眼窩以遠に浸潤する腫瘍
T4a	眼窩の軟部組織、骨浸潤なし
T4b	骨
T4c	副鼻腔
T4d	脳

## ■ N-所属リンパ節

NX	所属リンパ節転移の評価が不可能
N0	所属リンパ節転移なし
N1	所属リンパ節転移あり

所属リンパ節は、  
耳前リンパ節、顎下リンパ節、頸部リンパ節

## ■ M-遠隔転移

MX	遠隔転移の評価が不可能
M0	遠隔転移なし
M1	遠隔転移あり

## ■ pT-原発腫瘍

pT 分類は T 分類に準ずる。

## ■ pN-所属リンパ節

pN 分類は N 分類に準ずる。

## ■ pM-遠隔転移

pM 分類は M 分類に準ずる。

## ◆ G-病理組織学的分化度

GX	分化度の評価が不可能
G1	高分化
G2	中分化
G3	低分化
G4	未分化

## ■ 病期分類

(現在病期分類なし)

### ■進展度(臨床進行度)分類

	N0	N1
Tis	上皮内	
T1	限局	所属リンパ節転移
T2	限局	所属リンパ節転移
T3	限局	所属リンパ節転移
T4	隣接臓器浸潤	隣接臓器浸潤
M1	遠隔転移	遠隔転移

### 【結膜悪性黒色腫】

#### ■TNM分類(UICC 第7版、2009年)

#### ■T-原発腫瘍

TX	原発腫瘍の評価が不可能
T0	原発腫瘍を認めない
Tis	結膜上皮に限局する黒色腫 <sup>1</sup>
T1	球結膜にある腫瘍
T1a	球結膜の1/4象限以下に広がる腫瘍 <sup>2</sup>
T1b	球結膜の1/4象限をこえ、2/4以下に広がる腫瘍
T1c	球結膜の2/4象限をこえ、3/4以下に広がる腫瘍
T1d	球結膜の3/4象限をこえて広がる腫瘍
T2	眼瞼結膜、円蓋部、涙丘部結膜に波及する球結膜以外の悪性黒色腫
T2a	1/4象限以下で、涙丘以外の腫瘍
T2b	1/4象限をこえる、涙丘以外の腫瘍
T2c	結膜の1/4象限以下の涙丘腫瘍
T2d	結膜の1/4象限をこえる涙丘腫瘍
T3	以下の部位に限局浸潤する腫瘍
T3a	眼球
T3b	眼瞼
T3c	眼窩
T3d	副鼻腔
T4	中枢神経系に浸潤する腫瘍

注1: 上皮内黒色腫(原発性後天性メラノーマ PAM を含む)は健常な上皮厚の75%をこえて異型細胞が置換し、豊富な細胞質、胞核、または大きな核小体を含む上皮細胞の細胞学的特徴を有し、および/または、異型細胞の上皮内巢が存在する。

注2: 象限は時計の時刻で定義する。6時、9時、12時、3時など角膜中央から眼瞼縁とその先まで延長する。涙丘は二等分する。

#### ■N-所属リンパ節

NX	所属リンパ節転移の評価が不可能
N0	所属リンパ節転移なし
N1	所属リンパ節転移あり

所属リンパ節は、

耳前リンパ節、顎下リンパ節、頸部リンパ節

## ■M-遠隔転移

MX	遠隔転移の評価が不可能
M0	遠隔転移なし
M1	遠隔転移あり

## ■pT-原発腫瘍

pTX	原発腫瘍の評価が不可能
pT0	原発腫瘍を認めない
pTis	結膜上皮に局限する黒色腫(上皮内)*
pT1	球結膜にある腫瘍
pT1a	粘膜固有層に浸潤する厚さ0.5 mm以下の腫瘍
pT1b	粘膜固有層に浸潤する厚さ0.5 mmをこえるが1.5 mm以下の腫瘍
pT1c	粘膜固有層に浸潤する厚さ1.5 mmをこえる腫瘍
pT2	眼瞼結膜、円蓋部結膜、または涙丘結膜の黒色腫
pT2a	粘膜固有層に浸潤する厚さ0.5 mm以下の腫瘍
pT2b	粘膜固有層に浸潤する厚さ0.5 mmをこえるが1.5 mm以下の腫瘍
pT2c	粘膜固有層に浸潤する厚さ1.5 mmをこえる腫瘍
pT3	眼球、眼瞼、鼻涙系、副鼻腔、または眼窩に浸潤する黒色腫
pT4	中枢神経系に浸潤する腫瘍

注\* :pTis 上皮内黒色腫(原発性後天性メラノシスPAMを含む)は健常な上皮厚の75%をこえて異型細胞が置換し、豊富な細胞質、胞核、または大きな核小体を含む上皮細胞の細胞学的特徴を有し、および/または、異型細胞の上皮内巣が存在する。

## ■pN-所属リンパ節

pN 分類は N 分類に準ずる。

## ■pM-遠隔転移

pM 分類は M 分類に準ずる。

## ◆G-病理組織学的分化度

GX	分化度の評価が不可能
G0	原発性後天性メラノシス
G1	母斑より発生した悪性黒色腫
G2	原発性後天性メラノシスより発生した悪性黒色腫
G3	前駆病変なし(de novo)に発生した悪性黒色腫

## ■病期分類

(現在病期分類なし)

### ■ ■進展度(臨床進行度)分類

	N0	N1
Tis	上皮内	
T1a, T1b, T1c, T1d	限局	所属リンパ節転移
T2a, T2b, T2c, T2d	限局	所属リンパ節転移
T3a, T3b, T3c, T3d	隣接臓器浸潤	隣接臓器浸潤
T4	遠隔転移	遠隔転移
M1	遠隔転移	遠隔転移

### 【ぶどう膜悪性黒色腫】

#### 【一虹彩】

### ■ ■TNM 分類(UICC 第7版、2009年)

#### ■ T-原発腫瘍

TX	原発腫瘍の評価が不可能
T0	原発腫瘍を認めない
T1	虹彩に局在する腫瘍
T1a	大きさが 1/4 象限以下
T1b	大きさが 1/4 象限をこえる
T1c	二次性緑内障を伴う
T2	毛様体、脈絡膜、またはその両方に融合または進展する腫瘍
T2a	二次性緑内障を伴う
T3	毛様体、脈絡膜、またはその両方に融合または進展し、胸膜への進展を伴う腫瘍
T3a	二次性緑内障を伴う
T4	胸膜外への浸潤を伴う腫瘍
T4a	最大径が 5 mm以下
T4b	最大径が 5 mmをこえる

注: 虹彩黒色腫は、ぶどう膜のこの部位で発生し、大部分がこの部位に局在する。腫瘍体積の 1/2 未満が虹彩にある場合、原発部位は毛様体である可能性があるため、それに応じて分類するよう考慮する必要がある。

#### ■ N-所属リンパ節

NX	所属リンパ節転移の評価が不可能
N0	所属リンパ節転移なし
N1	所属リンパ節転移あり

所属リンパ節は、  
耳前リンパ節、顎下リンパ節、頸部リンパ節

#### ■ M-遠隔転移

MX	遠隔転移の評価が不可能
M0	遠隔転移なし
M1	遠隔転移あり

#### ■ pT-原発腫瘍

pT 分類は T 分類に準ずる。

### ■pN-所属リンパ節

pN 分類は N 分類に準ずる。

### ■pM-遠隔転移

pM 分類は M 分類に準ずる。

### ■病期分類

	NO	N1
T1a	I	IV
T1b, T1c	IIA	IV
T2, T2a	IIA	IV
T3, T3a	IIB	IV
T4a	IIIA	IV
T4b	IIIB	IV
M1	IV	IV

### ■進展度(臨床進行度)分類

	NO	N1
T1a, T1b, T1c	限局	所属リンパ節転移
T2, T2a	限局	所属リンパ節転移
T3, T3a	限局	所属リンパ節転移
T4a, T4b	隣接臓器浸潤	隣接臓器浸潤
M1	遠隔転移	遠隔転移

### 【一毛様体および脈絡膜】

#### ■TNM 分類(UICC 第7版、2009年)

#### ■T-原発腫瘍

原発性の毛様体および脈絡膜黒色腫は、下記の4つの腫瘍サイズ区分に従い分類される。

TX	原発腫瘍の評価が不可能
T0	原発腫瘍を認めない
T1	腫瘍サイズ区分1
T1a	毛様体への浸潤と眼球外への進展を伴わない
T1b	毛様体への浸潤を伴う
T1c	毛様体への浸潤はないが、5 mm以下の眼球外への進展を伴う
T1d	毛様体への浸潤と5 mm以下の眼球外への進展を伴う
T2	腫瘍サイズ区分2
T2a	毛様体への浸潤と眼球外への進展を伴わない
T2b	毛様体への浸潤を伴う
T2c	毛様体への浸潤はないが、5 mm以下の眼球外への進展を伴う
T2d	毛様体への浸潤と5 mm以下の眼球外への進展を伴う
T3	腫瘍サイズ区分3
T3a	毛様体への浸潤と眼球外への進展を伴わない

T3b	毛様体への浸潤を伴う
T3c	毛様体への浸潤はないが、5 mm以下の眼球外への進展を伴う
T3d	毛様体への浸潤と5 mm以下の眼球外への進展を伴う
T4	腫瘍サイズ区分 4
T4a	毛様体への浸潤と眼球外への進展を伴わない
T4b	毛様体への浸潤を伴う
T4c	毛様体への浸潤はないが、5 mm以下の眼球外への進展を伴う
T4d	毛様体への浸潤と5 mm以下の眼球外への進展を伴う
T4e	腫瘍サイズ区分に関係なく、5 mmをこえる眼球外への進展を伴う

注：1. 臨床的に、腫瘍の最大基底径は視神経乳頭径(dd、平均 1dd=1.5mm)で推定できる。腫瘍の厚さはジオプター(平均 2.5 ジオプター=1mm)で測定できる。しかし、より正確な測定には、超音波検査や眼底写真などの技術を使用する。毛様体への浸潤は、細隙灯、検眼鏡、隅角鏡、徹照で評価することができる。より正確な評価には高周波超音波(超音波生体顕微鏡)を使用する。強膜をこえる進展は手術の前後にエコー、CT、MRI の画像で評価する。

2. 固定後の組織病理学的検査では、組織縮小のため腫瘍径と厚さを過小評価する可能性がある。

#### <厚さと経に基づく毛様体と脈絡膜のぶどう膜黒色腫の分類>

厚さ(mm)							
>15					4	4	4
12.1-15.0				3	3	4	4
9.1-12.0		3	3	3	3	3	4
6.1-9.0	2	2	2	2	3	3	4
3.1-6.0	1	1	1	2	2	3	4
≤3.0	1	1	1	1	2	2	4
最大基底径(mm)	≤3.0	3.1-6.0	6.1-9.0	9.1-12.0	12.1-15.0	15.1-18.0	>18

#### ■N-所属リンパ節

NX	所属リンパ節転移の評価が不可能
N0	所属リンパ節転移なし
N1	所属リンパ節転移あり

所属リンパ節は、

耳前リンパ節、顎下リンパ節、頸部リンパ節

#### ■M-遠隔転移

MX	遠隔転移の評価が不可能
M0	遠隔転移なし
M1	遠隔転移あり

#### ■pT-原発腫瘍

pT 分類は T 分類に準ずる。

#### ■pN-所属リンパ節

pN 分類は N 分類に準ずる。

#### ■pM-遠隔転移

pM 分類は M 分類に準ずる。



## ■ 病期分類

	N0	N1
T1a	I	IV
T1b, T1c, T1d	IIA	IV
T2a	IIA	IV
T2b	IIB	IV
T2c, T2d	IIIA	IV
T3a	IIB	IV
T3b, T3c	IIIA	IV
T3d	IIIB	IV
T4a	IIIA	IV
T4b, T4c	IIIB	IV
T4d, T4e	IIIC	IV
M1	IV	IV

## ■ ■ 進展度(臨床進行度)分類

	N0	N1
T1a, T1b	限局	所属リンパ節転移
T1c, T1d	隣接臓器浸潤	隣接臓器浸潤
T2a, T2b	限局	所属リンパ節転移
T2c, T2d	隣接臓器浸潤	隣接臓器浸潤
T3a, T3b	限局	所属リンパ節転移
T3c, T3d	隣接臓器浸潤	隣接臓器浸潤
T4a, T4b	限局	所属リンパ節転移
T4c, T4d, T4e	隣接臓器浸潤	隣接臓器浸潤
M1	遠隔転移	遠隔転移

## 【網膜芽細胞腫】

両眼性症例では、両眼はそれぞれ別に分類される。本分類は腫瘍の完全な自然治癒には適用されない。

## ■ TNM 分類 (UICC 第 7 版、2009 年)

## ■ T-原発腫瘍

TX	原発腫瘍の評価が不可能
T0	原発腫瘍を認めない
T1	眼球体積の 2/3 以下で硝子体や網膜下への播種を認めない腫瘍
T1a	どちらの眼球についても、腫瘍の最大径が 3 mm 以下であるが、視神経または中心窩から 1.5 mm 以内に腫瘍を認めない
T1b	少なくとも 1 つの腫瘍の最大径が 3 mm をこえるか、視神経または中心窩 1.5 mm 以内にあるが、腫瘍の基底から 5 mm をこえる網膜剥離や網膜下液を認めない
T1c	少なくとも 1 つの腫瘍の最大径が 3 mm をこえるか、視神経または中心窩 1.5 mm 以内にあり、腫瘍の基底から 5 mm をこえる網膜剥離や網膜下液を認める。
T2	眼球体積の 2/3 以下で硝子体播種または網膜剥離を伴う網膜下播種を伴う腫瘍
T2a	腫瘍細胞の微細な凝塊の播種を硝子体および/または網膜下に限局的に認めるが、腫瘍細胞の大きな塊もしくは「雪玉様」播種は認めない。
T2b	腫瘍細胞の広範性凝塊もしくは「雪玉様」と定義される巨大な凝塊の播種を硝子体および/または網膜下認める
T3	重篤な眼球内腫瘍
T3a	眼球の 2/3 をこえる腫瘍
T3b	新生血管または隅角閉塞緑内障、前眼部に浸潤する腫瘍、前房出血、硝子体出血、眼窩蜂巣炎など腫瘍に関する 1 つ以上の合併症を認める。
T4	眼球外に浸潤する腫瘍
T4a	視神経への浸潤
T4b	眼窩への浸潤
T4c	視交叉までの頭蓋内進展
T4d	視交叉をこえる頭蓋内進展

## ■ N-所属リンパ節

NX	所属リンパ節転移の評価が不可能
N0	所属リンパ節転移なし
N1	所属リンパ節転移あり

所属リンパ節は、

耳前リンパ節、顎下リンパ節、頸部リンパ節

## ■ M-遠隔転移

MX	遠隔転移の評価が不可能
M0	遠隔転移なし
M1	遠隔転移あり

## ■pT-原発腫瘍

pTX	原発腫瘍の評価が不可能
pT0	原発腫瘍を認めない
pT1	眼球に限局し、視神経または脈絡膜への浸潤を伴わない
pT2	視神経および/または脈絡膜への微小浸潤
pT2a	視神経乳頭部の表面に浸潤するが、篩状板をこえて進展しない。 また限局する脈絡膜浸潤を示す
pT2b	視神経乳頭部の表面に浸潤するが、篩状板をこえて進展せず、 かつ限局する脈絡膜浸潤を示す
pT3	視神経および/または脈絡膜への著しい浸潤
pT3a	篩状板をこえるが視神経断端にまで浸潤していない。または脈絡膜への 著しい浸潤を示す
pT3b	篩状板をこえるが視神経断端にまで浸潤せず、かつ脈絡膜への著しい 浸潤を示す
pT4	視神経断端に浸潤する。またはそれ以外に眼球外への進展を示す
pT4a	視神経断端に浸潤するが、眼球外への進展はない
pT4b	視神経断端に浸潤し、眼球外への進展が認められる

## ■pN-所属リンパ節

pNX	所属リンパ節転移の評価が不可能
pN0	所属リンパ節転移なし
pN1	所属リンパ節転移あり
pN2	遠隔リンパ節転移あり

所属リンパ節は、

耳前リンパ節、顎下リンパ節、頸部リンパ節

## ■pM-遠隔転移

pMX	遠隔転移の評価が不可能
pM0	遠隔転移なし
pM1	遠隔転移あり
pM1a	中枢神経系以外の部位への単一性転移
pM1b	中枢神経系以外の部位への多発性転移
pM1c	中枢神経系への転移
pM1d	軟髄膜および/または脳脊髄液への浸潤のない非連続性腫瘍塊
pM1e	軟髄膜および/または脳脊髄液への浸潤

## ■病期分類

(現在病期分類なし)

### ■ ■ 進展度(臨床進行度)分類

	N0	N1
T1a, T1b, T1c	限局	所属リンパ節転移
T2a, T2b	限局	所属リンパ節転移
T3a, T3b	限局	所属リンパ節転移
T4a, T4b	隣接臓器浸潤	隣接臓器浸潤
T4c, T4d	遠隔転移	遠隔転移
M1	遠隔転移	遠隔転移

### 【眼窩肉腫】

#### ■ ■ TNM 分類 (UICC 第 7 版、2009 年)

##### ■ T-原発腫瘍

TX	原発腫瘍の評価が不可能
T0	原発腫瘍を認めない
T1	最大径が 15mm 以下の腫瘍
T2	最大径が 15mm をこえるが眼球、または骨壁への浸潤を伴わない腫瘍
T3	腫瘍の大きさに関係なく、眼窩組織、または骨壁へ浸潤を伴う腫瘍
T4	眼球、または眼窩周囲組織(眼瞼、側頭窩、鼻腔/副鼻腔、または中枢神経系など)に浸潤する腫瘍

##### ■ N-所属リンパ節

NX	所属リンパ節転移の評価が不可能
N0	所属リンパ節転移なし
N1	所属リンパ節転移あり

所属リンパ節は、

耳前リンパ節、顎下リンパ節、頸部リンパ節

##### ■ M-遠隔転移

MX	遠隔転移の評価が不可能
M0	遠隔転移なし
M1	遠隔転移あり

##### ■ pT-原発腫瘍

pT 分類は T 分類に準ずる。

##### ■ pN-所属リンパ節

pN 分類は N 分類に準ずる。

##### ■ pM-遠隔転移

pM 分類は M 分類に準ずる。

## ◆G 病理組織学的分化度

GX	分化度の評価が不可能
G1	高分化
G2	中分化
G3	低分化
G4	未分化

## ■病期分類

(現在病期分類なし)

## ■進展度(臨床進行度)分類

	N0	N1
T1	限局	所属リンパ節転移
T2	限局	所属リンパ節転移
T3	隣接臓器浸潤	隣接臓器浸潤
T4	隣接臓器浸潤	隣接臓器浸潤
M1	遠隔転移	遠隔転移

## 【涙腺癌】

## ■TNM 分類(UICC 第7版、2009年)

## ■T-原発腫瘍

TX	原発腫瘍の評価が不可能
T0	原発腫瘍を認めない
T1	最大径が2cm以下の腫瘍で、涙腺に限局する腫瘍
T2	最大径が2cmをこえるが4cm以下で、涙腺に限局する腫瘍
T3	4cmをこえる腫瘍、または視神経や眼球を含む涙腺以外の眼窩軟部組織に進展する腫瘍
T4	骨膜、眼窩骨、または隣接構造に浸潤する腫瘍
T4a	骨膜への浸潤
T4b	眼窩骨への浸潤
T4c	隣接構造(脳、副鼻腔、翼突窩、側頭窩)に浸潤

## ■N-所属リンパ節

NX	所属リンパ節転移の評価が不可能
N0	所属リンパ節転移なし
N1	所属リンパ節転移あり

所属リンパ節は、

耳前リンパ節、顎下リンパ節、頸部リンパ節

## ■M-遠隔転移

MX	遠隔転移の評価が不可能
M0	遠隔転移なし
M1	遠隔転移あり

## ■pT-原発腫瘍

pT分類はT分類に準ずる。

### ■pN-所属リンパ節

pN 分類は N 分類に準ずる。

### ■pM-遠隔転移

pM 分類は M 分類に準ずる。

### ◆G 病理組織学的分化度

GX	分化度の評価が不可能
G1	高分化
G2	中分化;basaloid (solid) pattern を示さない腺様嚢胞癌を含む
G3	低分化;basaloid (solid) pattern を示す腺様嚢胞癌を含む
G4	未分化

### ■病期分類

(現在病期分類なし)

### ■進展度(臨床進行度)分類

	N0	N1
T1	限局	所属リンパ節転移
T2	限局	所属リンパ節転移
T3	限局	所属リンパ節転移
T4a, T4b	隣接臓器浸潤	隣接臓器浸潤
T4c	遠隔転移	遠隔転移
M1	遠隔転移	遠隔転移

## 6. 取扱い規約

### 【病期分類】

眼部腫瘍の取扱い規約は存在しない。

### 【根治度の評価】

取扱い規約が存在しない。

## 7. 症状・診断検査

視診、視力、視野、眼位、眼球運動、眼球突出度などの眼科検査を行い、CT、MRI などで腫瘍の進行度を確認する。最終的には生検にて確定診断に至る。

## 8. 治療

### ① 眼瞼癌

- 1) 観血的な治療 (1)外科的治療
- 2) 放射線療法
- 3) その他の治療 (1) 症状緩和的な特異的治療 なし

### ② 結膜癌

- 1) 観血的な治療 (1)外科的治療
- 2) その他の治療 (1) 症状緩和的な特異的治療 なし

## ③ 結膜悪性黒色腫

- 1) 観血的な治療 (1) 外科的治療 眼内や眼窩内に浸潤している場合は眼球を摘出する。
- 2) その他の治療 (1) 症状緩和的な特異的治療 なし

## ④ ぶどう膜悪性黒色腫

- 1) 観血的な治療 (1) 外科的治療 眼球摘出術
- 2) 放射線療法 有効性が高い
- 3) その他の治療 (1) 光凝固 小型の腫瘍に対して行われる。(2) 症状緩和的な特異的治療 なし

## ⑤ 網膜芽細胞腫

- 1) 観血的な治療 外科的治療
- 2) 放射線治療
- 3) 薬物療法 (1) 化学療法 眼動脈注入、硝子体注入
- 4) その他の治療 (1) レーザー治療 (2) 冷凍凝固 (3) 眼球温熱療法  
(4) 症状緩和的な特異的治療 なし

## ⑥ 眼窩肉腫

- 1) 観血的な治療 (1) 外科的治療
- 2) 放射線治療
- 3) 薬物療法 (1) 化学療法
- 4) その他の治療 (1) 症状緩和的な特異的治療 なし

## ⑦ 涙腺癌

- 1) 観血的な治療 (1) 外科的治療
- 2) その他の治療 (1) 症状緩和的な特異的治療 なし

## 9. 略語一覧

## 10. 参考文献

- 1) UICC/TNM 悪性腫瘍の分類 第7版 日本語版(金原出版)
- 2) SEER Summary Staging Manual 2000, NIH Publication 01-4969
- 3) American Joint of Committee. AJCC Cancer Staging Manual, Sixth eds. Greene F. L. et al eds Springer: Chicago. 2002.
- 4) 眼科診療プラクティス編集委員編 眼科診療ガイド (文光堂)